美[illegible]會用

文學博士 井上頼圀本文監修
丸岡桂本文訂正
觀世清之節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠

始めたる年月日 大正　年　月　日

終りたる年月日 大正　年　月　日

稽古

感想

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、逓送料を添へて發行所へ送附せられれば、裝巧所は無料にて五番綴の美本に仕立直し逓送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正十四年二月二十日印刷
大正十四年二月二十五日發行

大正版 一番綴

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區東松下町十二番地 鈴木彌作
印刷所 東京市神田區東松下町十二番地 信英堂印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段二三〇五、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

の守にてますぞ痛はしき御身此
花の蔭に立ちより給ひしを。かく物
がたり申さんとて日を暮らしそ
めしなり。今は疑ひよもあらじ。花は
根に帰るなり。我が跡とひてたび給へ。
木蔭を旅の宿とせば。花こそあるじ
なりけれ。

さまこれハ公達の御中よとそあるら
めと。御名ゆかしき所よ。箙を見れバ
不思議やな。短冊をつけられたり。見
れバ旅宿の題をとり。行き暮れて。
木の下蔭を宿とせバ　花や今
宵の。主ならまし。忠度と書かれたり
さてハ疑ひ嵐の音よ。聞えし薩摩

しやあへなくも。六弥太太刀を抜き持ち。遂に御頭を。打ち落して。六弥太。心に思ふやう。痛はしやかの人の御死骸を見奉れば。其年もまだしき。長月頃のうす曇り。降りみ降らずみ定めなき。時雨ぞかよふむら紅葉の。錦の直垂は。ただ世の常によもあらじ。いか

地上

六弥太が郎等。御後より立ち廻り。上にまします忠度の。右の腕を打ち落せば。左の御手にて六弥太を取つて投げ除け今は適はじとおぼしめして。そこのき給へ人々よ。西拝まんと宣ひて。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と宣ひし。御聲の下よりも。痛は

方にうち出でしに。後を見れば。武藏の國の住人に。岡部の六弥太。忠澄と名のつて。六七騎にて追つかけたり。これこそ望む所よと思ひ。駒の手綱を引つ返せば。六弥太やがてむずと組み。両馬があひにどうと落ちしが。かの六弥太を取つておさへ。既に刀に手をかけしに

しに。望足りぬれば。又弓箭にたづさ
はりて。西海の波の上。暫しと頼む
須磨の浦。源氏の住所。平家のためは
よしなしと知らざりけるぞはかなき
さる程に一の谷の合戦。今はかうよと
見えし程に。皆々船に取り乗つて海上
に浮む　われも船に乗らんとて。汀の

後白河の院の御宇に千載集を撰ばる。五條の三位俊成の卿うけたまはつてこれを撰ず

下歌

年は壽永の秋の頃。都を出でし時なれば

上歌

さも忙はしかりし身の。さも忙はしかりし身の。心の花か蘭菊の。狐川より引き返し。俊成の家に行き歌の望を歎き

の定家君と申し。志あるべくハ作者を
つけてたび給へと。夢物語申すに。須
磨の浦風も心せよ　げにや和歌の
家に生れ。その道をたしなみ。敷島の
かげに寄りし事人倫に於いて専
なり　中にも此忠度は。文武二道を
受け給ひて世上に眼高し　そもそも

来りたり。さなきだに妄執多き娑婆
なるに。何となくの千載集の。歌の
しなには入りたれども。勅勘の身の
悲しさは。讀人知らずと書かれし事。
妄執の中の第一なり。されどもそれを
撰じ給ひし。俊成さへ空しくなり給
へば。御身は内にありし人なれば。今

千鳥の跡見えぬ磯山の夜の花に
旅寝して。浦風までも心して。春に
聞けとや音をてごき。須磨の関屋の旅
寝かな須磨の関屋の旅寝かな

後シテサシ上
ツヨク一声

心
恥かしや亡き跡に姿を返す夢のうち。
覚むる心は古へに。迷ふ雨夜の物語。
申さんために魂魄にうつりかはりて

花の蔭に寝て。夢の告をも待ち給へ。
都へ言傳て申さんとて花の蔭に
寄木の行く方知らずなりにけり行く
方知らずなりにけり　中入

まづ〳〵都に帰りて。定家にこの事
上歌（三人）待謡　申さんと夕月早くかげろふの。夕
月早くかげろふの。おのが友呼ぶ聲

忠度の聲きゝて花の臺に坐し給へ

シテ上 ありがたや今よりハ。かく弔ひの聲聞きて佛果を得んぞ嬉しき

地上 不思議や今の老人の。手向の聲を身に受けて。喜ぶ氣色見えたるハ何の故にてあるやらん

シテ上 お僧に訪はれ申さんとてこれまで來れりと

地上 夕べの

地拍子 訪はれ申さんとて

今宵の主(アルジ)ならましと。（カヽル上）詠(ナガ)めし人ハ薩摩の守（シテ詞）忠度と申し人ハ。此一の谷の合戦(カセン)に討たれぬ。ゆかりの人の植ゑ置きたる。しるしの木にて候なり

（ワキカヽル上）これハそも不思議の値遇(チグ)の縁(エン)。さしもさばかり俊成(トシナリ)の（シテ下）和歌の友とて浅からぬ（ワキ）宿ハ今宵の（シテ下）主(アルジ)の人（地）名も

シテ「行き暮れて木の下蔭を宿とせば。花や今宵の主ならましと。詠めし人は此苔の下。痛はしやわれらやうなる海士だにも。常は立ち寄り弔ひ申すに。お僧たちはなど逆縁ながら弔ひ給はぬ。おろかにまします人々かな ワキ「行き暮れて木の下蔭を宿とせば。花や

音にこそ厭ひしよ。須磨の若木の櫻は
海少しだにも隔てねば。通ふ浦風に山
の櫻も散るものを。　ワキ詞　いかに尉殿(ジョオドノ)はや
日の暮れて候。一夜(イチヤ)の宿を御貸し
候へ　シテ　うたてやな此花の蔭程のお宿
の候べきか　ワキ　げによくこれは花の宿
なれどもさりながら。誰を主(アルジ)と定むべき

と塩木とる道こそかはれ里離れの

シテ「人音稀に須磨の浦　近き後の山

里に　シテ上歌「柴といふもの候へば　地「柴と

いふもの候へば。塩木のためにも通ひくる

シテ「あまりに愚かなる。お僧の御諚かなや

地上「げにや須磨の浦餘の所にや變るらん。

それ花に辛き嶺の嵐や山風の。

ワキ詞 いかにこれなる老人。おことは此山賤(ヤマガツ)にてましますか

シテ さん候此浦の海士にて候

ワキカヽル上 (ヨワク) 海士ならば浦にこそ住むべきに。山ある方に通はんをば。山人とこそいふべけれ

シテ詞 そも海人(アマビト)の汲(ク)む汐をば。焼(ヤ)かで其まゝ置くべきか

ワキカヽル上 げにげにこれは理(コトワリ)なり。藻汐焼くなる夕煙

シテ 絶間(タエマ)を遅し

松の風。いづれも寂しからずといふ事
なき。又此須磨の山陰に一本の櫻の候。
これはある人のなき跡のしるしの木なり。
ことさら時しも春の花。手向のために
逆縁ながら。足引の山より帰るおり
ごとに。薪に花を折りそへて手向を
なして帰らん手向をなして帰らん

下ヨリ ここ、ヨワク 手向をなして イキ、ハ 帰らん トモ

運べど。乾せどもひまなき衣の。浦山
かけて須磨の海　海士の呼び聲
ひまなきに。屢鳴く千鳥。音ぞ遠き
抑此須磨の浦と申すは。寂しき故に
其名を得る。わくらばに問ふ人あらば
須磨の浦に。藻塩たれつゝ侘ぶと答
へよ。げにや漁のあま小舟。藻塩の煙

の音。聞かじとするに憂き事の。捨つる身までも有馬山。隠れかねたる世の中の。憂きに心はあだ夢の。覚むる枕に鐘遠き。難波は跡に鳴尾潟。沖に浪遠き小舟かな沖に浪遠き小舟かな

シテサシ上　一声

げに世を渡る習ひとて。かく憂き業にもこりずまの。汲まぬ時だに塩木を

サシ上 城南の離宮よりおもむき都を隔つる山崎や。関戸の宿は名のみして。泊りも果てぬ旅のならひ。うき身はいつもましわりの。塵の浮世の芥川。猪名の小笹を分け過ぎて

下歌 月も宿かる昆陽の池水底清く澄みなして

上歌 蘆の葉分の風の音。蘆の葉分の風

二番目

忠度

三月

シテ　平忠度の霊（前ハ老樵夫）
ワキ　僧

ワキ次第上（三へ）ヨワク

花をも憂しと捨つる身の。花をも憂しと捨つる身の月にも雲はいとはじ

ワキ詞

これは俊成の内にありし者にて候。さても俊成亡くなり給ひて後。かやうの姿となりて候。又西國を見ず候程に。此度思ひ立ち西國行脚と心ざし候

維茂　平繁盛の孫、鎮守府将軍貞盛に養はれて子となる。陸奥の豪族藤原師種を撃ちて武名著しく、後出羽介となり鎮守府将軍に任ぜらる。世に餘五将軍と称す。八十歳卒。

忠度　忠盛の子、清盛の末弟なり。正四位下左兵衛佐薩摩守たり。和歌に巧にして亦武名あり。腕力人に勝る。寿永三年二月平家一谷敗戦の時、岡部六弥太の為に討たる。時に四十一。

宗盛　清盛の次子、重盛の弟なり。内大臣従一位に進む。壇浦の戦に一門皆帝に殉じたるも、独怯懦にして終に捕へられ、後近江篠原に斬られて首を獄門に梟せらる。

知盛　清盛の子、従三位大納言たり。平家公達中の驍将なり。寿永三年四月壇浦の戦破れし時、御座船に至り、自ら船を掃除して、叔父教盛と共に従容死に著けり。時に年三十四。

重衡　清盛の子、従三位左近衛中将なり。源氏と戦ひて屢功あり。一谷の役に生田を守りて敗れ捕はれて鎌倉に送らる。頼朝美姫を遣して慰めたるも色に心を移さず。後木津川に斬られ、首を奈良坂に梟せらる。時に年二十九。

経正　清盛の弟、経盛の長子、正四位下皇后宮亮但馬守なり。和歌に巧にして善く琵琶を弾ず。幼にして仁和寺に在り。一谷陥りし時遂に敵に追はれしが汝は我が對手とするに足らずと豪語し戦はずして割腹せり。

敦盛　経盛の季子従五位下なり。職掌無かりしかば世に無官太夫と称す。一谷陥りし時熊谷直実と戦ひて討たる。時に年十六。

通盛　清盛の弟教盛の子、従三位中宮亮越前守なり。平氏一谷に敗れし時、湊川のほとりにて木村源三成綱に討たる。

清経　重盛の第三子、正四位下左近衛中将たり。寿永二年宗盛等筑紫に走り、西海に漂浪せし時、一夜月を見て悽愴禁ぜず。横笛を吹き朗詠して海に投じ、一門に先だちて死す。

知章　知盛の子、武蔵守たり。一谷陥りし時、父と共に逃れしも途に児玉黨に會ひ、勇戦して死せり。知盛は其隙に走ることを得たり。時に年十六。

二位尼　清盛の室、名は時子。建禮門院の母なり。落飾して世に二位禅尼と云ふ。平氏壇浦に亡びし時、安徳天皇を抱き海に投じて死せり。

建禮門院　名は徳子、平清盛の女、高倉天皇の中宮たり。安徳天皇を生む。平氏壇浦に亡びし時、帝に続きて海に入りしも源兵の為に救はる。後大原寂光院に在り。五十七、天寿を全うして薨ず。

大納言佐局　鳥飼中納言維實の女、五條大納言國綱に養はれ、平重衡の室たり。壇浦にて二位尼建禮門院に従ひて海に入りしも源兵に救はれ、後落飾して門院に従ひ寂光院に居り、一門の菩提を弔ふ。

熊野　遠江の國池田の宿の長者湯屋の娘名は侍従、宗盛遠江守たりし時寵を受け、久しく都に在りしが、後帰りて家に在り、重衡捕はれて東に下りし途、此宿に宿りし時、和歌を贈つて慰む。

謠曲に作られたる 平家の人々

- ○桓武天皇 ― 葛原親王 ― 高見王 ― 高望王（賜平姓） ― 平國香
  - 貞盛 ― 維衡 ― 正度 ― 忠盛
    - 清盛　……妻 二位尼（碇潜のツレ）
      - 重盛
        - 維盛 ― 六代丸
        - 資盛
        - 清經（清經のシテ）
        - 有盛
        - 師盛
        - 忠房
      - 基盛（養子）
      - 宗盛（熊野のワキ）　……妾 熊野（熊野のシテ）
        - 清宗
        - 能宗
      - 知盛（舟辨慶の後シテ 碇潜のシテ） ― 知章（知章のシテ）
      - 重衡（千手のツレ）　……妻 大納言佐局（大原御幸のツレ）
        - 知忠
      - 知度
      - 清房
      - 維俊
      - 清貞
      - 建禮門院（大原御幸のシテ）
    - 家盛
    - 經盛
      - 經正（經政のシテ）
      - 經俊
      - 敦盛（敦盛のシテ 生田敦盛のシテ）
    - 教盛
      - 通盛（通盛のシテ）
      - 教經
      - 業盛
    - 頼盛
    - 忠度（忠度のシテ 俊成忠度のシテ）
  - 繁盛 ― 兼忠 ― 維茂（紅葉狩のワキ）

後成が敕を奉じて撰ぜし歌集。 **歌のしな** 歌の品数 **敕勘の身** 云々 平家物語に忠度が俊成に自詠の和歌一巻を託したる事を記せる條に「くだんの巻物の中にさりぬべき歌いくらもありけれども、其身敕勘の人なれば名字をも顕されず、故郷花といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ讀み人しらずと入れられたる」と記して「さゝ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな」の詠を擧げ、さて又「其身敕勘となりぬる上は子細に及ばずと云ひながら、恨めかりし事どもなり」と記せり。 **志かるべくは** 云々 為し得べくは。 **心せよ** 浦風も夢物語を覚さぬやう心を用ひよの意。 **和歌の家** 歌道の家、忠度の父忠盛は金葉集以下歴代の敕撰集に撰ばれたる歌人なり。 **數島の蔭** 和歌の道

人倫 人間 **事なり** 和歌の家に生れて歌人となりし例は少からずとの意。 **眼高し** 世に重く視られしこと。 **壽永** 安德天皇の年號。これは壽永二年七月、平家都を落ちて福原に赴きし時の事なり。 **心の花** 雅情の意 **蘭菊の狐** 白氏文集に「狐藏蘭菊叢」とあるを借る。 **狐川** 山州名跡志に山崎より八幡及河内等に到る淀川の舟渡の所をいふと見ゆ。山崎橋のありし附近。今審ならず。されど忠度が狐川より返したりといふこと平家物語盛衰記に見えず。 **歌の望みを** 云々 忠度途より都に帰りて俊成卿を訪ひし時、撰集に加へられん歌の空しくなりしを歎けるをいふ。 **暫しと頼む** 云々 一度西海より戻りて暫し一の谷に據りしをいふ。 **源氏の住み所** 源氏物語に、光源氏須磨に侘び住ひしたる事を記せるに依りていへり。 **岡部の六彌太** 源平盛衰記に「武蔵國住人岡部六彌太忠澄」とあり。義經方の士。以下平家物語、盛衰記を参革して文を綴る。 **望む所** 討死せんに望む所。 **郎等** 從卒 **西拜まん** 西方淨土を拜まんとなり。 **光明遍照** 云々 觀經の文。彌陀の光明は到らぬ隈なく能く念佛の衆生を攝め取りて捨てずとの意。 **其年も** 云々 其年齡も未だ老いたるに非ず、光の長き身なりといふを、九月の異名長月に掛く。一の谷の戦は二月の事なれど、此「長月頃」の以下時に関係なく「錦」を呼出さん為の序としたり。 **村紅葉** 濃淡ある紅葉。 **錦の直垂** 紅葉の錦と續く。平家物語には「紺地の錦の直垂」、盛衰記に「赤地の錦の直垂」とあり。直垂は鎧の下に着たる衣。即、鎧直垂。 **公達** こゝには平家連枝の意。 **箙** 矢を入れて背に負ふ具。 **題をすゑ** 平家物語、源平盛衰記共に「旅宿花といふ題にて」とあり。 **嵐** あらじに掛く。 **花は根に** 云々 千載集に「花は根に鳥は古巣に帰るなり」云々とある歌の句を借りて冥界に戻る意とす。

故に云々 寂しきを以て有名なりとの意。其證歌多し。これを寂しき故に須磨と名づけたりとの意に解するは誤なり。 わくらはに云々 古今集に出でたる在原行平の歌。歌の意は行平の消息をたまさかにも問ふ人あらば、須磨の浦に侘び住まひして涙にのみくれ居ると答へよとなり。藻塩は藻を焼きて得たる塩、それを垂れたれといふ語につゞく。しほたれは、涙にそて袖のぬるゝ意。 逆縁 初より其心にあらで、事の序に手向くるよりいふ。 足引の 山の枕詞 山賤 樵夫 あま 漁夫、塩焼、舟子等の総称。 おそしと 煙に絶間を生ぜんことをおぞましく思ひての意にや。或は暇を惜しと思ふ意にて「惜し」とありしを傳へ誤りしものか。 道こそかはれ 山へ、海へ、行く道は変れども。 里離れの云々 源氏物語須磨の巻に「かの須磨の浦は昔こそ人のすみかなどもありけれ、今はいと里ばなれ心すごくて」とあるを借る。 後の山里に云々 同じ巻に「おはしますうしろの山に、柴といふものふすぶるなりけり」とあるに據る。 花に辛きは 花に情なく酷きものは。 若木の櫻 源氏物語須磨之巻に「植ゑし若木の櫻」云々とあるに據りて後世も須磨といへば若木の櫻と云ひ慣はしたり。 海少しだにも云々 海との隔たり少しも無ければ、浦風までも花につらしとなり。 花の宿 花の下に宿る意。 行き暮れて云々 此歌何の歌集にも無し。平家物語に「旅宿花」といふ題にて忠度の作りし事見ゆ。 おろか おろそか 忠度 平忠盛の末子、左兵衛佐薩摩守なり。寿永三年二月一ノ谷に敗れて岡部忠澄に討たる。年四十一。 ゆかりの人 縁有る人 値遇 佛教語。邂逅の意。 名も忠度 唯法と掛けて次句を起す。 花の臺 極楽に在りといふ蓮華臺。此臺に坐すとは成佛する意。 定家 俊成の子。正二位権中納言。敕を奉じて新古今、新敕撰の二歌集を撰ぜし歌人。今は俊成の亡後なれば、帰りて定家に語らんとなり。 夕月早く云々 月は宵の間の月なれば程も無く西空に陰るなり。これをかげろふ(蜻蛉)に云ひかけ、其縁にて友よぶといふ。 春に聞けばや 訪しき詞なり。諸本に此所の字を古来春と書きたるも不審なり。惟ふに春と春との誤にて、古くは松なりしなるべし。續千載集の旅の歌に「嵐の音を松に聞かずば」とよみたるもあり。 関屋 関守の住める家。須磨の関守をよめる古歌多し。 覺むる心は云々 夢の縁にて覺むると云へり。心が現世に甦る意。心の語を承けて「心は古へに迷ふ海士よ此」と前に會ひたる事を云ひ、「海士よ」の音をうけて續く。雨夜の物語は源氏物語箒木の巻の一節なれど、こゝには意味無し。 妄執 迷妄して執著する事。 婆娑 此世 何 なか〳〵の云々 何としてかなまじひに千載の時に遇ひながらといふ意にて千載集の語を起せり。己の歌の敕撰集に入りたるは千載の一遇なれど却つて妄執の縁になれりとなり。 千載集

出、「西拝まんと」より徐々に抑へて確り扱ひ、「法聲の」以下漸次位を鎮めて、稍しつとりとしたる味はひにあるべし。「痛はしや」云々はシテより少しく位進めど、決して軽々しかるべからず。「さては疑ひ」云々は穏かに寛りと、キリは心持を更へてさらりと、朗かに謡ふを宜しとす。

注意すべき謡ひ方

後ジテの「われも船に」以下の詞は充分心得を要する中に「西馬があひに」云々の句と次の句との間は聲は切れども前へかけて息を切らず。聞キも「取つておさへ」にて始めて聞く。此前後緩急に十分意を置くべき詞なり。又キリ前の「行きくれて」は一声の調子なれども章の終「宿とせば」は本落しに落さず、サシの如く中落しにて別に出づ。他に例無し。

辭解

花をも憂しと云々 花を捨て月を顧ざる世捨人の心を述ぶ。 **俊成** 後白河天皇の敕を奉じて千載和歌集を撰下したる歌人。五條に在りて皇太后宮大夫正三位たりしかば世に五條の三位と稱せらる。定家卿の父なり。 **城南の離宮** 山城國紀伊郡鳥羽に在りし白河、鳥羽両帝の離宮。 **山崎** 山城國乙訓郡の南限にして國堺の地。 **關戸の宿** 山崎の西。平家物語に平家都落ちの途中「山崎關戸院に玉の御輿を舁き居ゑて」とあれば、此事を追想せるものか。 **名のみして云々** 關戸といへど關は廢れて名にのみ遺れるを云ふ。 **芥川** 攝津國三島郡芥川村を貫流して淀川に注ぐ。 **猪名** 攝津國河邊郡猪名川畔の總名。猪名の笹原と詠みたる古歌多し。 **月も宿かる云々** 昆陽の池水に月の映ずるを小屋の字によせて宿かるといふ。此池は猪名野につゞける道の傍なれば古く其名著れなり。後拾遺集に「ゐな野なるこやの池水」云々、金葉集に「ゐなのふし原風こえてこやの池水」云々。 **聞かじとするに** 玉葉集に「憂しと思ひ恋しと思ふ其あたり聞かじや今は身を無きにして」とあるを借る。憂きことの捨てし身(僧侶)にさへ有るといふを有馬山に云ひかく。 **有馬山** 攝津國有馬郡中の山嶺の總稱なれど、古歌には猪名野に詠み合せたるが多ければ惟ふに六甲山の北の山嶺をいふなるべし。 **隱れ云々** 山に隱れと續く。 **憂きに心は云々** 引歌あるにや。俗をすてたる心の徒事なるを「あだ夢」の語につゞく。 **鳴尾潟** 攝津武庫郡武庫川口一帯の名。 **こりずまの** 懲りもせずにといふを土地の名に掛く。猶枕の草紙の「浦は」の條に見え、又古歌に数々見えたるこりずまの浦なり。即ち須磨の浦。 **塩木** 塩を焼くに用ふる薪。 **乾せども云々** 衣を乾さんとしても乾す暇無きを水衣に掛く、なれ衣は着慣れたる衣。 **浦山かけて** 浦から山へかけての意。衣の縁にて裏の音を借る。 **須磨** 攝津武庫郡、今の須磨村。住むに掛く。 **しば鳴く** しきりに啼く。 **寂しき**

忠度

解題 忠則、又は**忠敎**と書く。古くは観世流にて**薩摩守**、金春流にて**短冊忠度**といへり。平家物語、盛衰記により、忠度の亡霊が俊成の家臣に千載集に名を出されざりし妄執を語り、又戦物語をなして弔を受くる事を作れり。世子六十以後申楽談儀に世阿彌の作とあり。古書に記録多し。

謡ひ方梗概 優雅にして而も修羅なり。全篇緩急に富み、節の変化極めて多く、節附も甚多様なり。能く其心して学び、謡ふに忽なるべからず。

シテ シテは文武二道に達したる平家の公卿なれば、修羅物の中にても豪壮をのみ旨とせず、品位も美しさも有りて、然も強く健に扱ふべきものとす。**前**は常の老人と位変らざれど、どことなく底力有りてさらりとしたる心なるべし。**サシ**は抑へて稍低く淀まぬやうに謡ひ、**一声**は心静にさらりと太きく、次の**サシ**は初のサシよりもさらりとなりて、寂びしき風情を表すべし。「又此須磨の」云々の詞は気を更へて調子高からぬやう稍軽く扱ひ、「足曳の」より確りと静に謡ふ。**ワキとの問答**は落著ありて静に承け渡しつゝ次第に寄せ、「柴といふものゝゆへば」は別に出て、抑へめに淋しかるべし。**ワキとの掛合**は前の問答よりも位聊か進む。其中「詠めし人は此苔の下」は充分に心持あるべく、「痛はしや」云々はさらりとあるべし。「主の人」はかゝつて謡ひ廻しに少し強みを持つて地に渡す。「ありがたや」以下普通に謡ひて可なり。**後**は武人の強みを本として大きく謡ふうちにも、歌に妄執を留めたる優雅なる公子の面目を表すに努むべし。「恥づかしや」云々の**サシ**は此要領にて、飾り聲を励ます事無く出、以下節扱ひ吟の変化に注意して謡ひ、「心せよ」とクヅシて静む。「われも船に」以下総じて十分に気を掛け、勢好く気合確りとあるべし。「六七騎にて」、「両馬があひに」云々それぞれ心持あり。「六彌太心に思ふやう」は締めて落著好く、「花や今宵の」は引立てゝさらりと謡ふ。

ワキ 普通の僧ワキにて、手荒くならぬやう謡ふを宜しとす。**次第**は確りと少しく静に、**名告詞**は稍下目に取り、「又西国」より心持を更ふ。**サシ**はさらりめに謡へど派手になるを好まず。**下歌**にて更へ、以下運びを緩やかに謡ふべし。**シテとの問答掛合**はさらりと謡ふ。**待謡**は調子浮かぬやう、稍下目に取りて中庸く謡ふが宜し。後の**サシ**はさらりと軽かるべし。

地 「柴といふものゝゆへば」はシテを承けて静に謡ふべし、「げにや須磨の浦」云々はシテよりもさらりめに出、賑やかにならぬやう、閑寂の趣を表す。「名も忠度の」云々は抜けぬやうに附け、以下懸合さらりめに謡ひ、**中入の地**は稍静にあるべし。後の**クリ**はシテの謡と全く別に確りさらりと出、サシ以下凡てさらりと扱ふ。**下歌**は少しゆるめ、「さも忙はし」以下弛み無く気を乗せて謡ふ、「さる程に」は前と一変してクリ地の調子となり、位進む。「六彌太が郎等」云々はシテの語気を承けて、乗りかゝる如く勢ひて

忠度

解題 忠則、又は忠敏と書く。古くは観世流にて薩摩守、金春流にて短冊忠度といへり。平家物語、盛衰記により、忠度の亡霊が俊成の家臣に千載集に名を出されざりし妄執を語り、又戦物語をなして弔を受くる事を作れり。世子六十以後申楽談儀に世阿彌の作とあり。古書に記録多し。

謡ひ方梗概 優雅にして而も修羅なり。全篇緩急に富み、節の變化極めて多く、節附も甚多様なり。能く其心して學び、謡ふに忽なるべからず。

シテ シテは文武二道に達したる平家の公卿なれば、修羅物の中にても豪壮をのみ旨とせず、品位も美しさも有りて、然も強く健に扱ふべきものとす。前は常の老人と位變らざれど、どこともなく底力有りてさらりとしたる心なるべし。**サシ**は抑へて稍低く淀まぬやうに謡ひ、**一声**は心静にさらりと大きく、次の**サシ**は初のサシよりもさらりとなりて、寂びしき風情を表すべし。「又此須磨の」云々の詞は氣を更へて調子高からぬやう稍軽く扱ひ、「足曳の」より確りと静に謡ふ。**ワキとの問答**は落着ありて静に承け渡しつゝ次第に寄せ、「柴といふものゝゆつぱ」は別に出て、抑へめに淋しかるべし。**ワキとの掛合**は前の問答よりも位聊か進む。其中「詠めし人は此若の下」は充分に心持あるべく、「痛はしや」云々はさらりとあるべし。「主の人」はかゝつて謡ひ廻しに少し強みを持つて地に渡す。「ありがたや」以下普通に謡ひて可なり。**後**は武人の強みを本として大きく謡ふうちにも、歌に妄執を留めたる優雅なる公子の面目を表すに努むべし。「恥づかしや」云々の**サシ**は此要領にて、飾り聲を励ます事無く出、以下節扱ひ吟の變化に注意して謡ひ、「心せよ」とクヅシて静む。「われも船に」以下總じて十分に氣を掛け、勢好く氣合確りとあるべし。「六七騎にて」、「両馬があひに」云々それぞれ心持あり。「六彌太心に思ふやう」は締めて落着好く、「花や今宵の」は引立てゝさらりと謡ふ。

ワキ 普通の僧ワキにて、そ気くならぬやう謡ふを宜しとす。**次第**は確りと少しく静に、**名告詞**は稍下目に取り、「又西國」より心持を更ふ。**サシ**はさらりめに謡へど派手になるを好まず。**下歌**にて更へ、以下運びを緩やかに謡ふべし。**シテとの問答掛合**はさらりと謡ふ。**待謡**は調子浮かぬやう、稍下目に取りて中庸く謡ふが宜し。後の**サシ**はさらりと軽かるべし。

地 「柴といふものゝゆつぱ」はシテを承けて静に謡ふべし、「げにや須磨の浦」云々はシテよりもさらりめに出、賑やかにならぬやう、閑寂の趣を表す。「名も忠度の」云々は抜けぬやうに附け、以下懸合さらりめに謡ひ、**中入の地**は稍静にあるべし。後の**クリ**はシテの謡と全く別に確りさらりと出、サシ以下凡てさらりと扱ふ。**下歌**は少しゆるめ、「さも忙はし」以下弛み無く氣を乗せて謡ふ、「さる程に」は前と一變してクリ地の調子となり、位進む。「六彌太が郎等」云々はシテの語氣を承けて、乗りかゝる如く勢ひて

忠度

観世流改訂謡本

内八

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	始めたる年月日	終りたる年月日	稽古	感想
	大正　年　月　日	大正　年　月　日		

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段二三〇五、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

使用家の持權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、返送料を添へて發行所へ送附せられれば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正十四年五月一日印刷
大正十四年五月五日發行

大正版 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區東松下町十二番地 鈴木彌作
印刷所 東京市神田區東松下町十二番地 信英堂印刷所

美孫金甲

夕つけの鳥が鳴く東路さして、行く
道の。やがて休らふ逢坂の。関の戸ざし
も心して。明け行く跡の山見えて。花を
見捨つるかりがねの。それは越路われ
はまた。東に帰る名残かな。東に帰る
名残かな

はやく暇(イトマ)とらするぞ東(アヅマ)に下(クダ)り候へ

シテ上（晴々トスラリ）なに御暇と候や

ワキ拍（健カニ淀ミナクなかなかの事とく

とく下(クダ)り給ふべし

シテ中（静ニ落着ヨク）あら嬉しやたふ(ド)と(オ)

や。これ観音の御利生なり

地中（前ヲ受ケテ晴々ト滞リナク）これまでなりや

カヘテ（拍子合）これ

中（氣ヲ起シテ）

までなりや嬉しやな

嬉しやなかくて都にお供せば又もや

御(ギョ)意の変るべき唯此ままにお暇と。

下ノイロエヲ「短冊ノ段」ト呼ブ

げに村雨の降り来つて花を散らし

シテ上（引締メテ）いや心なの村雨やな春雨の

地（長閑ニタップリ上）ふるは涙か。ふるは涙か櫻花散るを

をしまぬ人やある。イロエ 打上 ワキ詞（静ニ確カリ）由ありげなる

詞のたね取り上げ見れば。中（素直ニ）いかにせん。

都の春も惜しけれど シテ中（落著ヨクスラリ）馴れし東の

花や散るらん ワキ詞（冷角立タヌヤウ）げに道理なり哀なり。

青かりし葉の秋又花の春は清水の。唯頼め頼もしき春も千手の花盛。

地（引立テサラリ）深き

シテ（朗カニタップリト）（拍子不合）山の名の。音羽嵐の花の雪

地 深き情を人や知る

素謡ニヌクコトモアリ

シテ（閑雅ニステラリト）わらはお酌に参り候べし

ワキ（素直ニ）いかに熊野一さし舞ひ候へ

地上（引立テタップリト）深き情を人や知る　中ノ舞

シテ（カヽツテ）のうのう俄に村雨のして花の散りはいかに

ワキ（健カニ淀ミナク）げに

●仕舞

（シヅメル下）ある粧ひ。佛も本は捨てし世の。半は（前ヨリ運ビテ）中
雲よ上見えぬ。鷲のお山の名を殘す。
寺は桂の橋柱。立ち出でゝ峯の雲。
花やあらぬ初櫻の。祇園林下河原。
シテ上（引立テ大ニキク）南を遙に眺むれば。大悲擁護の地（前ヨリ運ビヲ詰メ）
薄霞。熊野權現の移ります。御名も
同じ今熊野。稻荷の山の薄紅葉の。

たる雲　地（優ニ運ビヨク）柳は鶯飛ぶ片々たる金。
花は流水に随ひて香の来る事疾し。
鐘は寒雲を隔てて声の至る事
遅し　（拍子合）打切ヤ　クセ中（抑ヘズ滞リナク）清水寺の鐘の声。祇園精
舎をあらはし。諸行無常の声やらん。
地主権現の花の色。沙羅双樹の理
なり。生者必滅の世の習。げにためし

ツレ（スラリ）さんば　シテ（スラリ）さらぜ来らずるまでは。

（優ニカロク）のう〳〵皆〻近《チコオ》う寄り給へ。あら面白

の花やな。今を盛《サカリ》と見えて候よ。何とて

御当座などをも遊ばされ候《ワ》はぬぞ

クリ上（静ナル中ニ氣ヲカケテ）（拍子不合）げにや思《オモイ》ふ内あれば。色外《ホカ》に顕る

地（サラリト大キク）よしやよしなき世の習《ナラ》ひ。歎《ナゲ》きても又

あまりあり

シテサシ上（優ニ稍寛タリト）花前《ゼン》に蝶《チョオ》舞ふ紛《フン》紛《プン》と

●サシクセ獨吟
囃子切迄

ワキヅレ（サラリ）「畏つて候。」（別ニスラリ）いかに朝顔に申候。はや花の
もとの御酒宴の始まりて候。急いで
御参りあれとの御事にて候。其由
仰せられ候へ。ツレ（サラリ）「心得申候。」（優ニスラリ）いかに申候。
はや花のもとの御酒宴の始まりて候。
急いで御参りあれとの御事にて候。
シテ（閑雅ニ）「何とはや御酒宴の始まりたると申すか

地拍子注意
念誦してヲヤノ間ニ取ルハ非ナリ
◆素謡ニヌクコトモアリ

地（サラリ）「はや程もなくこれぞこの。シテ「車宿（ヤドリ）。
地（スラリト）「馬留（トドメ）。ここより花車。おりゐの衣（コロモ）播磨潟（ハリマガタ）。
飾磨の徒歩路清水の佛の御前よ。
念誦して母の祈誓を申さん。ワキ（健カニサラリ）「いかに
誰かある。ワキツレ（サラリ）「御前（オマエ）に候。ワキ（素直ニ）「熊野はいづくに
あるぞ。ワキツレ（サラリ）「未だ御堂に御座候。ワキ（落著アリテ）「何とて
遅（オソ）なはりたるぞ。急いで此方（コナタ）へと申し候へ

六道の辻とかや　シテ上（閑雅ニ）げに恐ろしや此道ハ。

冥途に通ふなるものを。心ぼそ鳥部山

地上（サラリ）煙の末も薄霞む。聲も旅雁の横たに

はる　シテ（優ニスラリ）北斗の星の曇無き　地（サラリ）御法の

地上（滞リナク運ビテ）花も開くなる　シテ中（抑ヘテ）經書堂ハこれかとよ

地上 そのたらちねを尋ぬなる。子安の塔を

過ぎ行けバ　シテ上（朗カニ）春のひまゆく駒の道

●獨吟

地拍子　あらたに

氣色かな名に負ふ春の氣色かな（シッカリ）・打切

ロンギ上（氣ヲ乗セテ運ビテ）●河原面を過ぎ行けば。急ぐ心の程もなく。車大路や六波羅の。地藏堂よと伏し拝む。

シテ上（派手ニナラヌヤウ）觀音も同座あり。闡提救世の。方便あらたに。たらちねを守り給へや

地上（池ミナクスラリト）げにや守の末すぐに頼む命は白玉の。愛宕の寺もうち過ぎぬ。

りあり　シテ山青く山白くして雲来去も

地　人楽しみ愁ひ。これ皆世上の有様なり

下歌　誰か言ひし春の色。げに長閑なる東山

上歌　●四條五條の橋の上。四條五條の橋の上。

老若男女貴賤都鄙。色めく花衣袖

を連ねて行く末の。雲かと見えて八重

一重。咲く九重の花盛。名に負ふ春の。

●小謡

シテ上（引立テ清ラカニ大キク）かぬる。足弱車の力なき花見なりけり

ヨワク（拍子不合）名も清き。水のまにとめくれば

地（長閑ニタツプリト）河は音羽の。山櫻　シテ（内ニ愁ヒテ、節タツプリト）東路とても東山

せめて。其方のなつかしや　地サシ上（淀ミナクステリ）春前に

雨あつて花の開くる事早し。秋後に

霜無うして落葉遅し。山外に山あつ

て山盡きず。路中に道多うして道極

永き別となりやせん。唯御暇を賜はり

ゆく。ワキ詞（カヽツテ確カリ）いやいやさやうに心弱き。身に任

せては叶ふまじ。いかにも心を慰めの。花

見の車同車にて。（引立テ）もろともに心をなぐさ

まんと（拍子合）地上歌（カヽツテ、サラリト）牛飼車寄せよとて。牛飼

車寄せよとて。これも思の家のうち。

中（上オサヘニ）はや御出でと勧むれど。（漸次ニシヅメル）心はさきに行き

下ノ打切ニ「車出」トテアシラヒ囃子アリ常ノ打切トハ大ニ異ル随ツテ返シノ謡出ニ心得ヲ要ス

こそ哀なれ詠みし事こそ哀なれ。

シテ（拍子不合）（氣ヲカヘテシツトリト）今はかやうに候へば。御暇を賜はり。東に下り候べし

ワキ（健カニ確カリ）老母の痛はりはさる事なれども。さりながら。此春ばかりの。花見の友。いかでか見捨て給ふべき

シテ上（カケテ留立タヌヤウ）御詞を返せば恨なれども。花は春あらば今に限るべからず。これはあだなる玉の緒の。

いよ〳〵見まくほしき君かなと。ある
事までも思出の涙ながら書き留む。
●小謡
地上歌
そも此歌と申すは。そも此歌と申すは。
在原の業平の。其身は朝に隙なきを。
長岡に住み給ふ老母の詠める歌なり。
さてこそ業平も。さらぬ別のなくも
がな。千代もと祈る子の為と詠みし事

唯然るべくはよきやうに申し。しばしの御暇を賜はりて。今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに。同じ世ながら添ひ給はぬは。孝行にもはづれ給ふべし。（心持ヲカヘテ）唯かへすがへすも命の内に今一度見参らせたくこそ候へとよ。（別ニ一息分ケテ）老いぬればさらぬ別れのありといへば。

となり。驪山宮の秋の夜の月終なき
しもあらず。末世一代教主の如来も。
（聊カ心持ヲ更ヘテ）
生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし
二月の頃申しし如く。何とやらん此春は。
年古りまさる朽木櫻。今年ばかりの
花をだに。待ちもやせじと心弱き。老の
鶯逢ふ事も涙に咽ぶばかりなり。

ワキヅレ「（スラリ）畏つて候。（氣ヲ更ヘテ）此方へ御参り候へ」

シテ「（丁寧ニ淀ミナク）いかに申し上げ候。老母の痛はり以つての外に候ふとて。此度は朝顔に文を上せて候。便無う候へども見参に入れ候べし

ワキ「（健カニ）何と古里よりの文とや。見るまでもなしそれにて高らかに讀み候へ（大キク確カリ）

●文ノ段
獨吟
（拍子不合）

シテ上「（清ラカニ淀ミナク）甘泉殿の春の夜の夢。心を碎く端

シテ（閑雅ニ）此上ハ朝顔なども連れて参り。又此文なども御目にかけて。御暇(イトマ)をも申さうずる

素謡ニヌクコトモアリ

さてあるぞ此方(コナタ)へ来り候へ」。（氣ヲ起シテ）誰かわたり候

「ワキヅレ 誰にて御座候ぞ トモ」

ワキヅレ（サラリ）誰にてわたり候ぞ。や。熊野の御参りにて候

シテ（優ニスラリ）さらば参りたる由御申候へ

ワキヅレ（サラリ）心得申候」。（氣ヲカヘテ丁寧ニ）いかに申し上げ候。熊野の御参りにて候

ワキ（健カニ）此方へ来れと申候へ

ツレ詞（スラリ）「池田の宿より朝顔が參りて候

シテ（閑雅）「なふ朝顔と申すか。あら珍しや。（氣ヲカヘテ、シットリ）さて御痛はりは何と御入りあるぞ

ツレ（スラリ）「以ての外に御入り候。これに御文の候。御覧候へ

シテ（シットリト）「あら嬉しや。まづ御文を見うずるにて候。」（間ヲトリ、心持シテ）あら笑止や。（愁ヒ心ニ）此御文のやうも頼もしげなう見えて候

ツレ（スラリ）「さやうに御入り候

これなる御内が熊野の御入り候處まそありげに候。まづ〳〵案内を申さばやと思ひ候。」（氣ヲカヘテ清ラカニ）いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が參りて候。それ〳〵御申し候へ

シテサシ上　アシラヒ出（拍子不合）

（濕ヤカニ寛タリト）草木は雨露の惠。養ひえては花の父母たり。况んや人間においてをや。あら御心許なや何とか御入り候らん

御下りもなく（トモ）

上せ給へども。更に御下りもなく候程に。

此度は朝顔が御迎に上り候。

道行上（花ヤカナラズ運ビヨク）（拍子合）此程の。

旅の衣の日も添ひて。旅の衣の日も添ひて。幾日暮の宿ならん夢も数そふ假枕。明し暮して程もなく。都に早く著きにけり都に早くつきにけり

詞（スラリト）急ぎ候程にこれははや都に著きて候。

りてあらバ此方へ申さへ

ワキツレ（スラリ）「畏つて候」

ツレ次第上（優ニスラリ）ヨワク（拍子合）「夢の間惜しき春なれや。夢の間惜しき春なれや咲く頃花を尋ねん

サシ上（重クレズ調子ヨク）（拍子不合）これハ遠江の國池田の宿。長者の御内より仕へ申す。朝顔と申す女にて候

詞（素直ニ）さても熊野久しく都に御のぼり候。此程老母の御痛はり候て。度々人を御

三番目

熊野（ユヤ）

三月

ツレ　朝顔
シテ　熊野
ワキ　平宗盛
ワキヅレ　太刀持

ワキ詞（落著テ確カリ）「これハ平（タイラ）の宗盛（ムネモリ）なり。さても遠江の國池田の宿（シュク）の長（チョオ）をバ熊野と申候。久しく都に留（トド）め置きて候が。老母（ロオボ）のいたはりとて度々（タビタビ）の暇（イトマ）をこひ候へども。此春ばかりの花見の友と思ひ留め置きて候」

（氣ヲカヘテ）いかに誰かある

ワキヅレ（スラリ）「御前に候

ワキ（確カリ）「熊野来

山の名とを以て音立てゝ吹く嵐に櫻の雪と散るを云ひ、雪の縁にて深きといふ深き物思を誰人ありて知るべきとなり。 **むら雨** 一しきり降る俄雨 **春雨の**云々 古今集大伴黒主の歌、下の句「散るを惜まぬ人し無ければ」。 **いかにせん**云々 熊野（侍従）が老母を思ひて詠める歌。一には都の春を見捨てんことを惜み一つには東の花の散りやせんと心にかゝる苦しさを歎けるなり。宗盛の寵愛を都の春に喩へ老母の命を東の花に喩ふ。 **利生** 衆生を利すること。前に觀音を伏し拜みたるを受けて今暇を得たるを觀音の利生ぞと喜ぶ。 **木綿附の鳥** 御暇と言ふを木綿にかく。木綿附鳥は鷄の異名。其鳥を受けてあづまの枕詞鳥が鳴くに續く。 **逢坂の關** 京より近江大津に入る道にありて、關東に通ずる關門なり。其關の戸ざしの開く意にて明け行くに云ひかく。

装束附

シテ（熊野）

面深井若女又は小面、鬘、鬘帶、襟白二、着附摺箔、唐織色入段の類着流、葛扇、短冊左の袂に入る。

ツレ（朝顔）

面連面、鬘、鬘帶、襟赤、着附摺箔、唐織着流、文懷中、

ワキ（平宗盛）

風折烏帽子、襟二つ、着附厚板、白大口、地紋單狩衣、縫紋腰帶、扇。

ワキツレ（従者）

着附無地熨斗目、素袍上下、鎮メ扇、小刀、太刀持つ。

車より下るを織るに掛け、其縁にて衣といふ。「ゐ」は或は誤にや。次に衣を張るといふ音を受けて播磨潟と續け、播磨の國飾磨より出づる褐(かちん)といふ染色の名にことよせて徒歩路(かちぢ)と云ひ、徒歩に來る意の「き」の音を受けて清水と續け、清水寺に到着したるを述ぶ。清水寺鐘堂の傍に鹿間塚といふあり。飾磨は是にも通はせたるにや。**當座** 即座にて詠ずる和歌。**思内にあれば**云々 本朝文粹の勘解相公の文に「情動二於中一、言形二於外一」。**よしやよし無き世** 「よ」の音を重ねて綾とせり **花前に蝶舞ふ**云々 謠曲拾葉抄に百聯抄解の詩句を引く。「花前蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金」。**花は流水に**云々 七言二聯の詩句なるべし。出所不明。**清水寺の鐘の聲**云々 平家物語、源平盛衰記の始に「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す」とあるを借り、清水寺の鐘、地主權現の花に取りなして言へり。地主權現は清水寺の鎮守にて昔より櫻の名木あり。祇園精舍は西天竺の寺の名、其寺の鐘は諸行無常、是生滅法、生滅滅己、寂滅爲樂と響くと言へり。娑羅雙樹は釋尊入滅の時忽に枯れたる天竺の木の名。**生者必滅** 生ある者は必ず滅すること。老母の病を思ひ煩ふ心なり。**半は雲に上見えぬ** 捨てし世の中と云ひかけ、中に續けて半といひ山の半の雲に隱れて見えざる意と、上見ぬ鷲といふ詞とを兼ねたり。**鷲のお山**云々 天竺の釋尊說法の地なる靈鷲山の名の祇園社の東方一帶の地に鷲の尾、又は靈山と稱して殘れるを云ひ、更に「名を殘す寺」と續けて昔在りて今は無き桂橋寺の名を出し。橋柱を續けて立ち出での序とす。**祇園林** 祇園社の南、石の鳥居の邊にありし林。**下河原** 祇園林より續ける鴨の川原 **大悲擁護の**云々 平家物語熊野參詣の條に「大悲擁護の霞は熊野山に棚引き、靈驗無雙の神明は音無川に跡を垂る」とあるを借り、其熊野權現を勸請したる今熊野に云ひ及ぶ。**稻荷の山の** 稻荷山は洛外紀伊郡深草山の北部なり。昔和泉式部こゝに詣でし途にて時雨に逢ひ、田を刈り居たる童よりあをといふ雨具を借りたる事ありしが、翌日童より式部に「時雨する稻荷の山のもみぢばのあをかりしより思ひそめてき」といふ歌を贈りしこと古今著聞集に見ゆ。これを借りて文藻とす。**唯賴め**云々 清水觀音の詠に「唯賴めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは」。(新古今集)、**千々** 様々の意花も千々に咲き亂れ熊野も千々に老母を思ふ心。**山の名の**云々 音羽山の山の名と、嵐山の

櫻、一重櫻、それを加へ數へて九重といへり。九重は帝都。 **名に負ふ** 有名なる **河原面** 鴨の河原なり。以下清水に到る道中を敍す。 **車大路** 五條橋以東の大道。即ち大和大路。急ぐと云ひて車の縁とす。 **六波羅** 六波羅密寺。五條松原の末、大和大路の東にあり。本尊十一面觀音は空也上人の作と傳ふ今觀音と一堂に地藏尊を安置せり。二體とも現に國寶に數へらる。 **同座** 同じ堂宇にある謂 **闡提救世の方便** 闡提とは不成佛の義。觀音菩薩の大慈悲を起して一切衆生を度し、然る後に成佛せんとするも衆生盡きざる爲成佛の期無きを云ふ。大悲闡提と稱ふ。闡提救世の方便は斯く己の不成佛をも顧ず世を救はんとする觀音の方便なり。 **あらたに** あらたかに。 **たらちね** 親 **賴む命** 云々 賴み思ふ母の命も何時を限りと知らぬ由を白玉に云ひかけ、玉の緒といふ語を連鎖として愛宕の寺に續く。玉の緒は人の命。 **愛宕の寺** 愛宕念佛寺。一に六道珍皇寺といふ。洛東五條の末、建仁寺の東南八坂塔の西に在り。又此附近を六道といふにより六道の辻と續く。六道の語は佛敎に出でたるにて、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六界の稱なれば實に恐ろしといへり。 **冥途に通ふ** 鳥邊野は墓所茶毘所なれば是に通ずる道を斯く云へり。冥途は死後亡魂の行く處。 **鳥邊山** 六波羅密寺の南東に當る。阿彌陀が嶺即ち今の豐國山なり。其裾を鳥邊野といふ。此處にて火葬の事榮花物語などに見えたり。次句「煙の末」とは春氣の煙れるを茶毘の煙かと思ひ惑ふ心なり。 **聲も旅鴈の** 云々 聲も呂と云ひさして旅雁に續く。呂は沈みたる寂しき樂音。これを和漢朗詠集の「北斗星横ニ旅雁ニ、南樓月下擣ニ寒衣ニ」の詩句にて繼き、北斗堂の佛事に云ひ及ぶ。北斗星は大熊星座の北星なれば其光の曇無きを佛法の徹底的なるに云ひかく。北斗堂は古く六道の東に在り、妙見菩薩を祀りしものなれど今は其址無し。 **御法の花も** 云々 妙法蓮華經を御法の花も開くなる經と云ひ延べて經書堂に續く。 **經書堂** 洛東清水寺西門前の產寧坂(又は三年)坂にあり來光院の俗稱。 **子安の塔** 經書堂と同所に在り。泰產堂、俗に子安觀音。 **春の隙行く** 云々 春の隙とは永き春日の一隙。極めて短き時間。これを人世の短く早き喩なる隙行く駒に云ひかけ、駒の道早と續けたり。莊子に「人生ニ天地之間ニ、若ニ白駒之過レ隙、忽然而已。」 **車宿り、馬留め** 清水西門の下、剡階の北に在りしもの。車を寄せ、馬を繫ぎおく處。 **花車** 花見の車 **おりゐの衣** 云々

一世の契と申せども」云々。**老いぬれば**云々 伊勢物語に出づ。長岡の里にて病床にありし業平の老母より業平のもとに贈りたる歌。年老いては斯く別れ居る程の假の別ならで死といふ長き別もあれば彌々見たく思はるゝ人よとの意。**在原業平** 平城天皇の皇子阿保親王の第五子、兄行平と共に在原姓を賜ひ、右近衞中將たり世に在五中將といふ。**朝** 朝廷の勤 **長岡** 山城國乙訓郡。今の向日町乙訓村新神足村の地。桓武天皇平安に奠都せらるゝ前、奈良の京を廢して暫らく宮居(延曆三――一三)せられし所なり。業平の母は此舊都に住まひしなり。**さらぬ別の**云々 業平よりの返歌「世の中にさらぬ別のなくもがな千世もと祈る人の子の爲」なくもがなとは無くあれよと願ふなり。**此春ばかり** 此春の頃といふ意。此春のみの意に非ず。**花は春あらば**云々 唐詩に「年年歲歲花相似、歲歲年年人不レ同」とある句の意を取るにや。**長き別** 新古今集に「これも又長き別になりやせん暮をまつべき命ならねば」**牛飼** 車の牛を御する男。これを呼びて「車を寄せよ」と命ずるなり。牛飼と車とを續け讀むべからず。**思ひの家** 佛敎語の火宅の譯。三界の安からざるを火に包まれし家宅に喩へし語。法華譬喩品に三車火宅の喩あるに出づ。こゝには是を詠じたる拾遺集の歌「世の中に牛の車の無かりせば思ひの家をいかで出でまし」を引く。**足弱車** 車輪の正しからで進むに滑ならざる車。**名も清き**云々 清水寺を云はんとて名も清水のと云ふべきを「名も清き水」と字を割り、古今集の「花散れる水のまにまにとめくれば山にも春はなくなりにけり」の歌の句を引く。**河は音羽** 引歌の山の語を河に更へ、河の音の縁にて音羽山に續く。音羽山は此にては清水の後の山を云へり。**東路**云々 東路は關東を指す。こゝは東路も東の方なれば今東山に行かんとして其方角が懷かしとなり。東山は京都洛東の山の總稱。**春前に**云々 百聯抄解の詩に「春前有レ雨花開早、秋後無レ霜葉落遲」とありと拾葉抄に見ゆ。**山外に**云々 百聯抄解の詩に「山外有レ山山不レ盡、路中多レ路路無レ窮」とありと拾葉抄に出づ。此句「山外」を「サント」と謠ひ慣はしたれども是は正しく「サンゲ」と讀むべきなり。**山青く山白く**云々 百聯抄解の詩に「山青山白雲來去、人樂人愁酒有無」とありと拾葉抄に見ゆ。**誰か云ひし**云々 和漢朗詠集に「誰言春色從レ東到」とあるを引きて東山に續く。**色めく花衣** それ〴〵美しく見ゆる花見衣。**八重一重** 雲かと見ゆる八重

惜き云々 櫻花は散り易きものなれば「春眠不レ覺レ曉」と歌はれし夢の暇をも惜み思ひて其散らざる暇にと都に急ぐ心を綴る。老母の命あらん間にと心急がるゝを花の爲の如く云ひなしたるなり。 **此程の**云々 此道行の一章は砧と同文にして、迎に上る侍女の名それは夕霧、これは朝顔なり。何れが何れに學びたるにや。 **日もそひて** 日數を經ての意。「日も」は衣の縁にて紐の音を受く。

假枕 旅宿の假寢。 **草木は雨露の惠** 本朝文粹の源順の賦に「草樹皆告二雨露之恩一」とあるを引き老母の恩と雨露の惠に喩ふ。 **養ひ得ては**云々 和漢朗詠集に紀納言の仙家春雨の詩に「養得自爲二花父母一」を引き、櫻花の時に逢ひて彌深く母を思ふ心を敍す。 **見うずる** 「見んずる」の音便。見んにてある。 **笑止や** 嬉しからざる嘆聲

賴み少く 心細く望無き意。「すくなく」を濁りて讀むは讀癖なれど實は淸みて讀むべき詞なり。 **便無う** たよりなく。 **見參** 見する事の敬語。 **甘泉殿の**云々 以下母の文なり。漢の武帝の寵姬李夫人が住みし甘泉殿の春の夜の暖かりし契の夢は李夫人死して却て悲の種となりきと筆を起す此事蹟は花筐のクセに作らる。 **驪山宮の**云々 唐の玄宗皇帝が寵姬楊貴妃と七月七月驪山宮に行く末を誓ひし其夜の月も貴妃死して全からずと重ねて例を引く。此事蹟は楊貴妃に作らる。以上二句は平家物語維盛入水の條に「かの驪山宮の秋の夕べの契も遂には心を碎くはしとなり。甘泉殿の生前の恩も終なきにしもあらず」とあるを少しく改めたるものなり。 **末世一代**云々 末代濁世の敎主卽ち釋迦如來も生死の捉遁れ難くして入滅せりとなり。 **きさらぎ** 二月の異稱。

朽木櫻 續千載集に「いかにせん朽木の櫻老いぬとて心の花はしる人も無し」などの用例に從ひ老體を朽木の櫻に比ぶ。「年ふりまさる」は年古くなりまさる意。 **今年ばかり**云々 新千載集に「病かぎりに侍りける春、三月の廿日あまりまで庭の花おそく咲き侍りけるによめる」と詞書して從三位藤子の歌「をりしもあれ心づくしに待たれずは今年ばかりの花は見てまし」とあるを引き、それは花を待ちえたるも我は其今年ばかりの花をさへ待ちえざるにはあらぬかと心弱く云ふとなり。 **老の鶯**云々 老の憂きといふ音を取り、前の花の縁にて鶯といひ。更に鶯の字音「アウ」を受けて逢ふといひ、其逢ふ事も無きかと歎かるゝ意を以て涙といひかけたり。 **親子は一世** 佛敎にて親子の緣は一世といふに據る。法苑珠林に「父母之恩」（中略）俗稱乳哺生二我肉身一、一世之恩尙復難レ報」、保元物語に「親子は

「あら嬉しや」と、音の扱ひを靜に謠ふべし。

ツレ　輕めにすらりと扱ひ、シテよりは聲高かるべし。

ワキ　落着有りて確りと大きく、多少位を取る程の心有り。要所を摘めば、「いや〳〵さやうに」の詞は引立てゝ謠ひ、「由有りげなる」云々は心持有りて靜に謠ふ。**ワキツレ**(トモ)は輕かるべし。

地　「そも此歌と申すは」云々は多少しつとりとしたる味はひに謠へど、運びはさしてゆるからず。「牛飼車寄せよとて」は前へかけて出、少しかゝつてさらりと謠ふべし。「河は音羽の」は氣を新めて長閑にたつぷりと謠ひ。「春前に雨あつて」はサシの調子にてすら〳〵と、「誰か云ひしは更へずに、稍のんびりとあるべし。「四條五條の橋の上」は更へて派手やかに又華やかに謠ふ。**ロンギ**は前程に華やかならず、音も聊か下目に取れど、シテよりは晴れやかに氣を乘せて謠ふが宜し。「よしやよしなき以下位さらりとなる。**クセ**はさして靜ならず、餘り乘らずに謠ふ。「深き情を」は引立てゝさらりと謠ひ、「ふるは涙か」もすらりとあるべし。**キリ**は氣を更へて出、喜びて歸り行く心をさらりと晴れやかに謠ひ納む。

辭解　**平宗盛**　清盛の二子、重盛の弟なり。平治亂の戰功にて遠江守に任ぜられ、後累進して內大臣從一位に及べり。　**池田の宿の長**云々　平家物語重衡海道下りの條に「池田の宿にも着き給ひぬ。かの宿の長者熊野が娘侍從の許に其夜は宿らせ給ひけり。(中略)景時畏りて申しけるは、君は未だ知ろし召され候はずや、あれこそ八島の大臣(宗盛をさす)の未だ當國の守にて渡らせ給ひし時召され參らせて御最愛候ひしに、老母を是に留め置き、常は暇を申しゝかども賜はざりければ、頃は彌生の始にてもや候ひけん。如何にせん都の春は惜しけれどなれしあづまの花や散るらんと、いふ名歌仕り、暇賜はりて罷り下り候ひし海道一の名人にて候ひけるとぞ申しける」と見ゆ。「長を熊野と」いふ由いひて直に其娘侍從の事に扱ひたるは創作當時の文を改竄したる間に生せし誤謬なるべし。深く咎むるにも及ぶまじ。さて此池田は今は池田村と云ひて天龍川の東岸に一小村として名殘を止むれども、昔は其西岸にありしものなること、太平記俊基朝臣東下の條にて明なり。其後河流變じたるため地勢革まり昔の宿は河底となりたるが如し。夫木抄に「そのかみの里は川瀨となりにけりこゝに池田の同じ名なれど」とも見ゆ。村の行興寺に熊野の女の墓と稱するもの存すれども固より後人の假託なり。　**いたはり**　病氣　**夢の間**

熊野

解題 遊屋、又は湯谷と書きたるもあり。平宗盛の妾たりし熊野の娘、其母の病重きを聞き歸鄕を乞ひたれど許されざりしが、東山の花見の席に一首の秀歌を詠じ、これによりて暇を乞ひ得たることを作れり。歌舞髓腦記、拾玉得花、禪鳳習道目錄等に曲名見え、永正年中粟田口勸進猿樂(金春)に演ぜられたれども、觀世流の古き記錄に無し。後世、世阿彌の作と稱すれども或は金春一派の著作なるべし。諸名寄に宗盛といふ曲名あるは此曲の別名にや。別曲ありとは思はれず。

能之小書 小書に村雨留、膝行、讀繼之傳、及び墨繼之傳あり、其中謠に影響あるものは讀繼之傳と稱するものなり。「なにと故鄕よりの」云々のワキの詞「さらば諸共に讀み候べし」と變り、文の段の初めより「咽ぶばかりなり」までをワキ一人にて謠ひ、以下「書き留む」までをシテとワキとにて連吟す。

謠ひ方梗概 愁ひ有れど沈まず、三番目物の本旨を保ちて、花やかなるうちに痛める樣、雨を帶びたる花の如かるべし。

シテ 全篇を通して病母を氣遣ふ心を失ふ事無く、陰鬱に陷らずして、尙能く幽玄の容をうつすべきものとす。**サシ**は低めに取りて濕やかに扱ひ、獨言つ態にあるべし。**ツレとの**詞は輕めに承け渡して心持有るべく、殊に「あら笑止や」は文を見ていふ處なれば、一息間を取りて驚く樣に出づ。**ワキへの**詞は叮嚀なるが宜し。「甘泉殿の」以下**文之段**は曲中の謠處にて、句每に種々の心持有れど老母の文を讀むに外ならねば要はサシの調子にて、それよりもさらりと素直に、音を淸く扱ひ、全體に弛惰の無きやう心掛くべし。「老いぬれば」云々は古歌を別書にしたる心なれば別に一息分けて出で、終の「書き留む」は拍子に合せてしつぽりと謠ひ止む。「さて今はかやうに候へば」は更へて心もと無げに謠ひ、「御詞を返せば」は前へかけて出、「花は春あらば」より鎭める。「名も淸き」は一聲の調子にて引立てゝ謠ふ。これより花見に赴く心持なれど、露だにも浮き立つべからず。**ロンギ**は地よりも靜にして派手にならぬやう謠ひ、景情相伴ふを要す。「のう〱皆」の詞は少しく間をおきて輕めに出づ。**クリ**は靜なる中に氣を掛け、次の**サシ**は常と異なりて稍寛りとあるべし。**上端**は靜に大きく出づ。「山の名の」云々は一聲の調子にて引立てゝめに謠ひ、舞後の「のう〱」はかゝつて出、以下さらりと謠ふ。「なれし東の」は前の氣を繼いで落着好く承け、「なに御暇と候や」は晴れやかにすらりと扱ひ、しみ〲と嬉しき心にて

熊野

観世流改訂謡本

内 八

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習いたる曲目
始めたる年月日 大正　年　月　日
終りたる年月日 大正　年　月　日
稽古
感想

使用者の特権

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番至十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別番組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く[illegible]、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、装[illegible]料は無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。かくして使用家は觀世[illegible]一段の五番綴謡本を得らるべく候

著作權所有

大正七年三月二十日印刷
大正七年三月三十日發行

（大正版 一番綴）

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 王居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地 電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

地拍子
成佛得脫の

きんと思ひしに。思はざるに御弔ひの。御法の船にのりえて。即ち弘誓の。舟に浮めば水馴れ棹さしてゆく程に生死の海をも渡りて願のまゝに。やすくと彼の岸に到り。彼の岸に到り到りて。成佛得脱の身となりぬ成佛の。身とぞなりにける。

地拍子

りと。刺し通し。刺し通されば肝。魂も。
消え消えとなるところを。其まゝ海に。
押しのけられて。千尋の底に。沈みしに
シテ「をりふしひく汐に　地「をりふしひく汐に。
ひかれてゆく浪の浮きぬ沈みぬ埋木
の岩の。はざまに流れかゝって。藤戸の
水底の。悪龍の。水神となって恨をな

●仕舞

賜はる程の御悦びもわれ故なれば
いかなる恩をもたまはるべきに思の
外に一命を。召されし事は馬にて。海を
渡せしよりも。これぞ稀代の例なる。
さても忘れがたや。あれなる。浮洲の
岩の上にわれを連れて行く水の。氷の、
ごとくなるかたなを抜いて。胸のあた

●弱吟

恨を夕月の。その夜よせくる浦浪の

「シテ詞」藤戸の渡り教へよとの。仰も重き岩

波の。河瀬のやうなる浅みの通りを

「地上」教へしまゝよ渡りしかぞ 「シテ」弓矢の

御名を揚ぐるのみか 「地」昔より今に至

るまで。馬にて海を渡す事 「シテ」稀代の

ためしなれぞとて 「地」此島を御恩に

罪科もあるべきよしなかりける。海
路のしるべ。思へバ三途の。瀬ぶみなり
不思議やなはや明け方の水上より。
怪しげなる人の見えたるハ。彼の亡者もや
見ゆらんと。奇異の思ひをなしければ
御弔ひありがたけれども。恨ハ盡きぬ
妄執を。申さん為に来りたり　何と

もわぬ弔ひの。般若の船のおのづから。
其ともづなをとく法の。心を静め聲を
上げ　一切有情。殺害三界不墮悪趣

後シテサシ　ヨワク　一声

憂しや思ひ出でじ。忘れんと思ふ心
こそ。忘れぬよりは思なれ。さるにても
身はあだ浪の定なくとも。科はよる
べの水よこそ。濁る心の罪ならば。重き

立てうずるにてあるぞ。まづ我が家に帰り候へ」いかに誰かある。餘りに彼の者不便に候程に。様々の弔ひをなし。又今の母をも世に立てうずるにてあるぞ。其由申しつけ候へ　中入　狂言シカ〳〵

待謡　ツヨク

上歌（三人）様々に。弔ふ法の聲たてゝ。弔ふ法の聲たてゝ。浪に浮寝の夜ともなく。晝と　下

もあらばこそ。さても憂き身なるも
のを。亡き子と同じ道になしてたばせ
給へと。人目も知らず伏しまろび。我が
子を返させ給へやと。うつゝなき有様を
見るこそ哀れなりけれ。あら不便やな。
今は恨みてもかひなき事にてあるぞ。
彼の者の跡をも弔ひ。又妻子をも世よ

鶴の。眠のうちあれや。夢とぞ思ふ親と
子の。はたち餘りの年あさみかりそめよ
立ち離れしかども。待ちどほよ思ひしよ。
又その世よ逢ふべき世よ住めば。
憂き節しげき河竹の杖柱とも頼
みつる。海士の此世を去りぬれば。今は
何よか命の露をかけてまし。ありがひ

千里を行けども。子をば忘れぬ親なるよ。
失はれまゐらせし。こはそも何の報ぞ
げにや人の親の。心は闇にあらねども
子を思ふ道に迷ふとは今こそ思ひ
知られたれ。本よりも定めなき。世の理は
目のあたり。老少不定のさかひなれば。
若きをさきだてゝ。つれなく残る老

浮洲の岩の。少し此方の水の深みに。
死骸を深く隠しおき　シテ　さてハ今の
申しても。少しもたがはざりけり。あの
ほそりぞと夕波の　ワキ　夜の事にて
ありし程よ。人ハ知らじと思ひしよ
やがて隠れハなき跡を　ワキ　深く隠しおきて
思へども　シテ　好事門を出でず　地上　悪事

らんと思ひ。不便に存じしかども。そつてひき寄せ。二刀刺し。其まゝ海に沈めて帰りしが。さては我が子にてありけるよな。よしく何事も前世の事と思ひ。今は恨みを晴れゆく　シテ　さてのう我が子を沈め給ひし。在所はこのわきどつくの程までゆくぞ　ワキ　あれに見えたる

様なる處の山。月がしらより東にあり。月のすゑは西にあると申す。即ち八幡大菩薩の御告と思ひ。家の子若黨にも深く隠し。彼の者と唯二人夜にまぎれ忍び出で。此海の淺みを見置きて歸りしが。盛綱心に思ふやう。やゝ下郎は條なき者にて。又も人に語

早詞

言語道断。かゝる不便なる事こそ候はね。今ハ何をか包むべき。其時の有様語つて聞かせ候べし。近う寄つて聞き候へ。さても去年三月廿五日の夜に入りて。浦の男を一人近づけ。此海を馬にて渡すべき処やあると尋ねしに。彼の者申すやう。さん候河瀬の

世の人の扱ひ草も繁きものを何と隠し給ふらん 上歌 住みはてぬ。此世ハ假の宿なるを。此世ハ假の宿なるを親子ぞ何やらん。まぼろしよ生れきて。別るれバ悲みの。思ひハ世々をひく。絆となりて苦みの。海に沈め給ひしをせめてハ訪はせ給へや。跡弔はせ給へや。

シテ 心得ずしてのう我が子を波に沈め給ひし事ばば。あら音高しあまよく

シテカヽル上 のう猶も人ハ知らじそのう。あらくよ其有様をあらはして。跡をも弔ひ又ハ世に生き残りたる母が身をも。訪ひ慰めてたび給へ。少しハ恨も晴るべきに

地下歌 いつまでとてか信夫山。忍ぶかひなき

こそ泣きぬ世をバなげけよ。何ゝ恨みんもと
よりも。因果の廻る小車の。やたけの人
の罪科ハ。皆報ぞといひながら。我が子
ながらも餘りげに。科も例も浪の底に。
沈め給ひし御情なき。申しまをつけて
便なけれども。御前に参りてはなり
何と我が子を浪に沈めし　恨をバ更に

佐々木殿の御入部にてあるぞ。何事
も訴訟あらん者ハ罷り出でゝ申せ
老の波越えて藤戸の明暮に。昔の
春の。かへれかし　不思議やなこれなる
女の。訴訟ありげに某を見てさめ〴〵と
泣くぞ。何事にてあるぞ　海士の
苅る藻に栖む虫のわれからと。音を

浪静かなる島廻り。松吹く風も長閑にて
げに春めける朝ぼらけ。船も道ある浦
傳ひ。藤戸に早く著きにけり藤戸に
早く著きにけり
「いかに誰かある
「御前に候 「皆々訴訟あらん者は
罷り出でよと申し候へ 「畏って候。いかに
皆々たしかに聞き候へ。此浦の御主

九番習
四番目

藤戸

三月

前シテ 漁夫ノ母　後シテ 漁夫ノ靈
ワキ 佐々木盛綱
ワキツレ 従者

次第 上（三人）ツヨク
春の湊の行く末や春の湊の行く末や藤戸の渡なるらん

ワキ詞
これは佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕り。御恩賞に児島を賜はつて候。今日は日もよく候程に。唯今入部仕り候

道行 上（三人）
秋津洲の。浪靜なる島廻り。

藤戸

観世流改訂謡本　内八